

そして1923年にはインスリンの臨床試用が行われ、デンマークにおけるインスリン生産が開始され、ヨーロッパ全体を支配するようになったのである。

ノルデスク・インスリン研究所はクローとハーゲドンの共同研究事業であり、世界的にも知られ、インスリン生産は円滑であった。

ステノ・メモリアル病院を設立し多くの糖尿病患者の治療に情熱をかたむけた。

持続型インスリン開発のためにプロタミン・インスリンをつくり、その販売網は世界全体に広がった。そのために新しいインスリン工場をつくったりした。

第二次世界大戦での混乱は、回復に戦後なお数年を要した。研究開発の停滞を打破するために、

アメリカ旅行、南極海調査航海、新しい病院研究所の設立などをしたが、次第に体力が尽き、パーキンソン病を発症し、車椅子生活となり最後を迎えた。

著者のデッカート氏はステノ・メモリアル病院の高名な医師で訳者の旧知の学者であるという。細かな点まで注釈や文献が入れてあって理解しやすい。一般読者も興味と好奇心で面白く読める一冊である。

(藤倉 一郎)

[時空出版、東京都文京区小石川4-18-3、2007年9月、454頁、3,900円+税]

酒井耕造 著

『近世会津の村と社会——地域の暮らしと医療——』

本書は、2004年5月11日、享年46歳を今生の一期として旅立った酒井耕造氏の著作集である。全体の章立ては以下の通りである。

第一部 博物館の現場から——地域と資料への想い

- 一 古文書の読み方 Q & A
- 二 古文書をどう保存するか
- 三 教育普及図書『ふくしまの古文書』
- 四 「はんこ」と花押
- 五 老百姓と百姓代は同じですか？
- 六 文献にみる地震
- 七 企画展「げんき・病・元気」
- 八 企画展「生の中の死」
- 九 企画展「戊辰戦争といま」

第二部 研究の原点——近世会津の村の組織と諸集団

- 一 郡・荘・郷と組
- 二 郷頭制と地域秩序
- 三 「郷頭家」と郷頭役

- 四 禿百姓と諸集団
- 五 肝煎と惣百姓
- 六 肝煎・地首と老百姓
- 七 兼帯名主の村支配

第三部 研究の軌跡——村をめぐる習俗と医療

- 一 甲斐国都留郡下吉田村の流鏑馬祭礼
- 二 会津の頼母子講
- 三 富士山北麓の薬園と山論
- 四 会津藩における種痘の普及と民俗
- 五 戦国の城のゆくえ
- 六 南山御蔵入領の戦国旧臣と農兵

酒井氏は、地域社会の政治的な地域秩序に関する研究をすすめるとともに、病いと医療に関する課題にも取り組んだ。また、福島県立博物館の学芸員として病あるいは生や死に関する企画展も担当した。

企画展「げんき・病・元気」は、近世から近代を中心に、病氣・医者・病院・薬・マジナイ・信仰・予防・風呂等の関係資料を基として構成さ

れ、近代・前近代の人々と現代に生きる我々の生命観等について考えた。もう一つの企画展「生の中の死」では、近世から近代を中心として、人間の誕生と死を福島県内に残る史料を中心に表現し、人間が生と死に対して持つ意識の変遷を描き出すことが目的とされた。本書では、この企画展に込められたメッセージを端的に示す文章も取り上げられている。

ここでは、本書に収録された医療に関わる論考として「富士山北麓の薬園と山論」及び「会津藩における種痘の普及と民俗」を紹介する。

前者は、享保期の薬草政策について、幕府権力との関わりとして論じられた従来の研究に対し、地域の人びとが薬草政策をどのように捉え、どのような影響をもたらされていたかを検討したものである。富士山北麓を対象とした分析は、幕府の薬草調査・保護と当該地域の人びとの山野利用との関わりから論じられている。そこでは、富士山北麓の利用をめぐる訴訟の過程から、薬園の存在が近隣の村々から尊重されていたことを指摘している。この点に加え、上吉田という村が、幕府が誤記した薬園下賜証文を利用して富士山北麓における権利の拡大をはかる姿から、公儀の権威を逆手に取った百姓の、近隣の村々や幕府に対する周到な戦略の存在が指摘されている。

後者は、従来の幕末期における種痘普及の研究が、医師たちの活動に焦点が当てられていたのに対し、疱瘡や種痘と領主や民衆との関係性に注目した。その際、疱瘡対策をめぐる民俗及び種痘の普及を取り上げ、両者の関わりにも検討を加えている。

疱瘡対策をめぐる民俗については、赤牛・疱瘡

神・祈禱・庭火焚き・薬等、それぞれについて取り上げ、それら複数の方法が平行して実施されていたこと、またそれらが1848・9（嘉永元・2）年頃までは盛んに史料上に現れるが、以後、火を焚くことと神丸という薬のみしか確認できなくなることなどを指摘している。また、神丸といった薬が支配者の管理下に置かれ、領主の「御尊慮」による「御救」として領民に分け与えられていたことから、領主の権威を再確認させようという志向性を見出している。

他方、種痘の普及については、会津藩における種痘の開始時期や接種方法に加え、種痘普及を目的とした刊行書や触書をつかって種痘普及の障害及び旧来からの民俗との関係性について検討している。そのなかでは、1853・4（嘉永6・7）年頃から種痘に関する活動は活発になり、同時に種痘普及をめぐる藩の関与が次第に大きくなっていく様子から、種痘を自らの管理下に置こうとする藩の志向性も指摘している。

2つの企画展と各論考からは、支配・被支配という関係に加え、生と死をめぐる人びとの意識まで描き出そうとする意欲が感じられる。医療を視点とする研究の可能性が詰め込まれた本書をご一読いただき、医療をめぐる研究を深化させる上でおおいに参照されることを期待したい。

（竹原 万雄）

〔編集・発行：酒井耕造著作集刊行会、頒布価格：2500円、A5判、324頁、あいづね情報出版舎へ直接お申し込みください。〕

TEL: 0242-27-3130 FAX: 0242-26-5603,
〒965-0826 会津若松市門田町大字御山字村中
332-1, E-mail: aizune@knpgateway.co.jp〕

梅溪 昇 著

『続 洪庵・適塾の研究』

会誌編集部より梅溪昇著『続 洪庵・適塾の研究』の書評を依頼された。筆者は洪庵・適塾に関して造詣の深い専門家ではないし、洪庵と適塾関

係者の業績の顕彰を目的とする適塾記念会の会員でもない。しかし本書には、埋もれていた古い拙稿が紹介されていることから無関係ではないし、